

## 1. 展望①国内情勢 (p. 1)

### ①小泉訪朝の謎

訪朝の決断は年金未加入問題や7月の参議院議員選挙対策ではな

い。拉致問題の棚上げ日朝国交正常化交渉の再開が「成果」だった。

### ②宮中に浸透した「上田正昭史観」

後藤田正晴など旧内務官僚は戦後民主主義的進歩的文化人を天皇に近づけ朝鮮半島との宥和を図っている。歴史学者・京大名誉教授上田正昭の古代日本と朝鮮研究は宮中で猛威を振るっている。

### ③日本の進路をめぐる皇室内の葛藤

小泉総理は、この5月7日と20日の二度にわたり、宮中に参内し、天皇陛下に内奏をおこなっている。今回の訪朝の背後には、我が国の繁栄には朝鮮半島の平和と安定が不可欠、との天皇陛下との固い

ご信念があった。一方、これに雅子妃殿下問題を通じて、総理の訪朝

に反対の立場を表明された皇太子殿下は5月12日から22日まで訪欧され、14日の小泉訪朝発表から22日の訪問までの期間、日本外交から事実上、蚊帳の外に置かれたのだった。

## 2. 展望②我が国の戦略なき対ロ外交 (p. 6)

ロシアの景気拡大を背景として、我が国企業の対ロ投資も上昇傾向にある。来年には、政府の後押しを受けて、総額一兆円ともいわれる東シベリアの石油開発並びにパイプライン敷設という大プロジェクトへの参加も濃厚といわれている。ところが、現在、我が国には、本格的にプーチン・ロシアの戦略を分析・研究した著作も報告書も存在しない。

欧米のオイルメジャーでさえ、悪戦苦闘しているプーチン・ロシアでのエネルギー開発に参加するには、綿密な戦略が不可欠にもかかわらずである。今こそ、本格的な対ユーラシア戦略の策定が急務である。

